広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第35号　2007. 3〉

「特色ある教育実習プログラム」の試行的取組（Ⅱ）

―本格的実施に向けての成果と課題―

木村　博一　松浦　伸和　鈴木由美子　前田　俊二
志水　康雄　磯崎　哲夫　小山　正孝　長松　正康
下向井龍彦　江端　義夫　迫田久美子　柳原　英兒
宮本　栞　岡野　説子　内田　雅三　古賀　一博
岡本　祐子　山下　芳樹　神野　正喜　大松　恭宏
見藤　孝二　河野　芳文　原田　良三　島本　靖
金丸　純二　竹盛　浩二　廣澤　和雄　財満由美子
金岡　美幸　此枝　昇

1．「特色ある教育実習プログラム」の概要

「特色ある教育実習プログラム」の試行については，その成果を「広島大学における『特色ある教育実習プログラム』の構築に向けて」（『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第33号，2005），「『特色ある教育実習プログラム』の試行的取組」（同紀要第34号，2006）に報告してきており，本稿は続編である。

「特色ある教育実習プログラム」の提案の概要は，次頁の表１及び表２に示した構想のとおりである。ここに示した二つの表は，昨年度の紀要に掲載したものと基本的に同じであるが，平成18年度の試行を踏まえて修正を加えている。

さて，「特色ある教育実習プログラム」を構想し試行した基本的な問題意識は，次の２点に要約できる。

第一は，教育実習に関わる科目とその履修時期に関する問題点である。現行の教育実習においては，大多数の学生が，１単位の事前指導（観察実習）と５単位又は４単位の本実習（教壇実習）を３年次又は４年次で履修することになっている。それ以前には，教育実習に関する科目が開設されておらず，「教員になるという意識を学部教育の早期から育む必要がある」「教育学部に入学したのに，児童・生徒と触れ合う機会が少ない」等の指摘が，大学及び附属学校の教員等からだけでなく，１年生及び２年生からも寄せられていた。そうした指摘を踏まえて設定したのが，第１年次の「教育実習入門」，第２年次の「教育実習観察」である。

第二は，教育実習の実施校園に関する問題点である。昨年度の報告には，「現行の教育実習において，学生は原則として広島大学の附属学校園において実習を行っている。言うまでもなく附属学校園における教育実習は多大な意義を有し，成果を上げている。が，一方で実際に彼らを待っているのは公立学校の教壇である。」[1]という指摘がなされている。この問題点を少しでも解消するための方策の一つとして，一昨年度から社会貢献検討委員会の所掌で試行されてきた第４年次の「インターンシップ型教育実習」を，本年度から教育実習部会の所掌として実施することにした。本年度のインターンシップ型教育実習には29名の学生が受講を申し込んでおり，平成17年２月中・下旬の実施予定である。

（文責：木村博一）

Hirokazu Kimura, Nobukazu Matsuura, Yumiko Suzuki, Shunji Maeda, Yasuo Shimizu, Tetsuo Isozaki, Masataka Koyama, Masayasu Nagamatsu, Tatsuhiko Shimomukai, Yoshio Ebata, Kumiko Sakoda, Eiji Yanagihara, Shiori Miyamoto, Setsuko Okano, Masazou Uchida, Kazuhiro Koga, Yuko Okamoto, Yoshiki Yamashita, Masaki Jinno, Yasuhiro Omatsu, Koji Mito, Yoshifumi Kono, Ryozou Harada, Yasushi Shimamoto, Jyunji Kanamaru, Koji Takemori, Kazuo Hirosawa, Yumiko Zaima, Miyuki Kaneoka, Noboru Konoeda: A tentative trial of 'Distinct Teaching Practice' at Hiroshima University(Ⅱ)

表１　小学校教育実習の４年間

１　年　生	２　年　生	３　年　生	４　年　生
ふ　れ　あ　い　型	学　校　参　加　型	実　習　型	インターンシップ型
○「地域教育実践Ⅰ」「地域教育実践Ⅱ」（フレンドシップ事業） →子ども理解，学校理解	○近隣公立学校（付属校）等における観察参加等 ○隣接校種の参観	○現行の教育実習継承 ○近隣公立学校の活用	○就職直前実習（近隣公立学校）
入　門　型			リサーチ型
○「小学校教育実習入門」という名称の「入門」系の科目を設定 →学校の授業参観なども含む			○卒業研究にリンクさせた実践現場での活動
○附属教員による「すぐれた授業」の参観（H18年度試行）	○「小学校教育実習観察」３年生の本実習に観察参加し教育実習の事前体験（H18年度試行）		

表２　中・高等学校教育実習の４年間

１　年　生	２　年　生	３　年　生	４　年　生
入　門　型	学　校　参　加　型	実　習　型	インターンシップ型
○「中・高等学校教育実習入門」という名称の「入門」系の科目を設定 →学校の授業参観なども含む	○「学校」を知る，「生徒」を知る。授業は行わず，定期的に学校を訪問する。	○現行では４年生（７セメと８セメ）の教育実習を３年生（６セメ）に移行して実施	○就職直前実習（近隣公立学校）
			リサーチ型
			○卒業研究にリンクさせた実践現場での活動
○附属教員による「すぐれた授業」の参観（H18年度試行）	○「中・高等学校教育実習観察」３年生の本実習に観察参加し教育実習の事前体験（H18年度は３年生で試行）	○近隣公立学校等で補充的教育実習	

２．研究の目的

本研究の目的は，昨年度（平成17年度）に引き続いて，一昨年度（平成16年度）に教育実習部会が開発した「特色ある教育実習プログラム」[2)]の一部を試行的に実施し，このプログラムの有効性を検証することによって，来年度（平成19年度）からの本格的実施に向けての成果と課題を見いだすことである。

昨年度は，「特色ある教育実習プログラム」の中で，「附属学校での本実習の期間中に，１学年下の学生を数日間参加させ，実習内容を体験させる」という「教育実習観察」を希望学生を対象にして試行的に実施し，その有効性を検証することによって，「教育実習観察」の成果と課題を明らかにした[3)]。昨年度，この「教育実習観察」に参加した学生は，小学校教育実習の場合は２年次生８名，中・高等学校教育実習の場合は３年次生79名であった。したがって，「特色ある教育実習プログラム」の試行的取組に関する研究としては，次の２点が取り組むべき課題として残された。

（１）１年次生を対象とした入門型教育実習であり附属学校教員による「すぐれた授業」を参観し，それについて考察・討議する「教育実習入門」を試行的に実施し，その成果と課題を明らかにすること。

（２）「教育実習観察」をその対象学生（小学校教育実習の場合は２年次生，中・高等学校教育実習の場合は３年次生）を昨年度よりも広げて実施し，その有効性について引き続き検証すること。

そこで，本年度（平成18年度）は，「特色ある教育実習プログラム」の一部として，これら２つの「教育実習入門」と「教育実習観察」を試行的に実施し，来年度からの本格的実施に向けての成果と課題を見いだし，このプログラムがさらに効果が上がるものになるよう，ソフトとハードの両面の改善策を検討することとした。

以下，本稿では，まず第３節で，上記（１）の「教育実習入門」に関する検証として，学生のアンケートやレポートなどの分析と附属学校からの評価を基にして，その成果と課題を明らかにする。次いで第４節では，上記（２）の「教育実習観察」において観察される側の本実習の学生の反応や附属学校からの評価を基にして，その成果と課題を明らかにする。そして，第

5節では，これら「教育実習入門」と「教育実習観察」についての成果と課題を踏まえて，「特色ある教育実習プログラム」の来年度からの本格的実施に向けての課題と展望を述べる。　（文責：小山正孝）

3．教育実習入門に関する検証：中高等学校実習の場合

3.1　新入生の変化

現行の中高等学校に関する教育実習は，事前指導が行われる3年次までその機会が設定されていない。そのため，入学時に抱いている教職に対する強い意欲が徐々に低下する傾向にある。新システムではそれを解消するために，新入生の入学直後から附属学校ですぐれた授業を観察する「教育実習入門」を開設することとした。

本年度はその効果を検討するために，1セメスターで第二類，第三類の6教科で先導的に実施した。具体的には，附属中・高等学校（4月25日），附属三原中学校（5月17日），附属東雲小学校（6月16日）で授業観察とそれに続く授業説明や討議を行った。ここでは，その成果や課題について理科，技術・情報，英語の3教科で検証する。

(1) 理科の場合

「理科教育入門」では，開設が第一セメスターであること，一連の教育実習につながる導入科目として，特に次の点を主眼に講義・演習を実施した。すなわち，理科教育とは何か，理科授業とはどのように構成されるのか，教師は理科授業をどのようにして組み立てているのか，などを認識し，理解することである。そして，最も重視したのが，生徒の視点から教師の視点で授業を観察することである。

基本的には，まず，理科室や準備室の施設・設備をまず観察することを，授業観察の第一の視点とした。次に，授業が一般的に「導入」・「展開（観察・実験活動を含む）」・「まとめ」の3つから構成されること説明し，時系列でどのような教授・学習活動が行われているかを第二の視点とした。また，第一日目に限り最初の授業観察では，教室の活動全体に焦点化した観察をするのではなく，授業者の行動に焦点化し，同日の第二回目の授業観察では，生徒の活動を中心に観察するようにした。これは，視点を明確にした観察方法を習得するためである。

さて，3日の観察実習と講義を通して受講生がどのように変容したかについて，受講生の観察録と課題レポート（課題名「授業観察で学んだこと」）（分析資料はランダムに抽出）から分析してみたい。

観察録を分析すると，第一日目，二日目，三日目とその記述方法に大きな変化を認めることは必ずしも容易ではなかった。また，視点を明確にした観察も一部においては認められる部分もあったけれども，概して観察記録の方法に今後工夫すべき所が多々あったことも事実である。この点については，今後の検討課題であろう。

一方，講義最終段階において課された課題レポートでは，受講生の変容を見極めるための特徴的な意見がいくつも見られた。

例えば，「見せていただいたどの授業でも，今まで生徒として授業を受ける立場ではわからなかった授業者の先生がされている様々な工夫や授業を行う中での苦労などを知ることができました。」，「理科教育入門での3日間の授業観察ではっききれないほどのたくさんの発見があり，貴重な体験をすることができました。」，「活発な意見交換ができる場…そのような空間を作り出すのも教師の課題の1つであろう。」，「私は授業観察で初めて教員としての視線で授業を見て様々な事を感じ，学ぶことができた。」など，生徒の視点で授業を観ることから，授業者の視点から授業を観ることへ視点の変容が少なからず出来ていると言えるであろう。

また，実習録や課題レポートには，受講生が観察授業における授業者の授業工夫点を詳細に記録しているものもあった。

いずれにしても，本講義の最初で設定した授業観察の視点の変容は，限られた資料の分析からではあるが，概ね達成できたように思われる。

加えて，広島大学で実施されている学生による授業評価では，記述部分において本講義全体を肯定的に見る評価が極めて多かったことも，受講生の観察録や課題レポートと合わせて，本講義の有効性の証左になるものと思われる。　（文責：磯﨑哲夫）

(2) 技術・情報の場合

実施の概要

本年度実施の「技術・情報教育入門」について，実施の概要を述べたのち，「実習生」の受講前後の変化について考察する。

事前指導においては，簡単な事例をもとにどのように「教える」か各自に考えさせた後，授業観察の視点として教材・教具，実習等の授業環境，生徒，教師のそれぞれについて例をあげて説明し，考えさせた。

観察実施日においては各授業時の授業者による解説，質疑，討議を実施計画に沿って行うとともに，授業時の教師の振る舞いを中心にビデオ記録を行った。大学に戻ったのちビデオから授業展開の主要な場面の静止画を取り出し，それぞれに教師，生徒の発言など簡単なコメントを付した配布物を作成し，簡単なビデ

オ編集を行った。

観察実習の翌週と翌々週はビデオ視聴と学習指導案，配布物をもとに様々な視点から考察を行った。

実習生に見られた変化

授業に取り組む態度として，１年次生の段階としては予想以上に積極的に考えようとする姿勢が感じられた。

レポートにおいて，まだ教育法に関する講義を受ける前の段階であるため表現の稚拙さは見られたが，それぞれの授業におけるねらいやそれに伴う指導法の違い，教員による考え方の違いについて自分なりに分析し理解しようとする姿勢がみられた。

ある授業において，安全で効率のよい作業を行うねらいで工具の扱いに関し詳しく説明していたが，別の授業では，「最低限危険な使い方は避けるが，生徒が自分で考え工夫させる」ことをねらい，説明を最小限にとどめ，生徒が自分で考えることを重視する授業があった。レポートにおいてこの点を対比させ考察を行っている例が複数みられた。いずれも，是か非かの問題として捉えるのではなく，ねらいの違いとして把握し考察しようとしている。これは実習の目的である学生から授業者への「視点の転換」を示す一つの例と言える。

全日程終了後のアンケートにおいて17名中10名に自由記述欄の記述が見られた。そのうち実施方法の要望等を除く８名が肯定的に捉えている。

・「実際に教育の現場を見ることができたのがとても良かった。」

・「生の授業が観察できたこと。」

・「実際に，高校や中学校に行ったりしたことは，とても良い刺激になり良かったです。今後も観察実習は続けて欲しいと思います。」

など，授業の観察経験の肯定的評価。

・「生徒（学生）自身に考えさせることが多かったので，とてもためになったと思います。」

・「（略）観察実習の反省・見直し・討議を行い有意義な講義だった。観察実習と関連する講義がありいい経験になった。」

など，授業後の説明・討議，あるいは大学に戻ったのちの分析，討議に意義を見出しているものが見られた。

１年次にこのような実習を行うことで，今後の履修における理解の深まりと積極性が期待できる。その一方で，実施担当者としての課題も感じられた。

学生としての行動規準と職業人として常識的な行動規準には隔たりがある。例えば「生徒の前での振る舞いに注意を払う」のは当然のことであるが，高校生気分の残る１年前期の段階では必ずしも彼ら全員にとっての「常識」にはなり得ていない。十分な事前指導を行う必要性があるが，禁止事項ばかりを列挙する指導とならないよう，所期の目的である「視点の転換」に効果的に結びつくような事前指導のあり方を考えたい。（文責：長松正康）

(3) 英語の場合

英語科では，リサーチオフィスのプロジェクトとして平成17年度生から実施している。その有効性に関しては松浦（2006）[4]で，「英語科では今回の試みは大きな成果を収めたと言える。入学後わずか１ヶ月に教育実習を行ったことで，入学時に抱いていた教職に対する意識をさらに高めることができた。また，９月の実習を通して維持することにも成功したようである」と報告されている。「彼らの今後の学習態度や意欲の推移を今後とも見守る」とあるので，ここでは1年半が経過した現在，どの程度添加しているのかを分析する。

上記のプロジェクトでは，教育学部の新入生の教職意識はどの程度なのか，授業参観を行うことで教職意識が向上するのかなどを知るために，入学動機，授業への期待感，学習への態度や意欲，将来の見通しの４項目についてアンケート調査を２度実施した（９月と12月）。

今回も同様の調査を2007年１月に実施して，９月の結果と比較検討した。

①授業への期待感

生徒の心身の発達に関する科目，生徒指導やカウンセリングに関する科目，教科の指導法に関する科目，教科の専門内容に関する科目，特別活動の指導法に関する科目，教育実習のそれぞれに関する期待感を問うものである。結果は以下の通りである（4が最高）。

１年９月	3.1	3.4	3.9	3.9	3.2	3.3
２年１月	3.7	3.7	3.7	3.5	3.4	3.6

１分野を除いてすべて3.5以上の高い結果となっており，依然として高い意識が維持されていると言える。特に「生徒の心身の発達に関する科目」は0.6ポイントの上昇が見られる。

②学習への態度や意欲

昨年「英語教育入門」を実施して，学習態度や意欲の高まりに効果が見られた。そこで，それらの変化を調査した。

調査項目は，授業には必ず出席している，授業などに遅刻をしない，授業態度はまじめである，専門教科に関する勉強を自主的に行っている，専門に関する本や雑誌を読んでいる，の５項目である。結果を以下に示す（4が最高）。

１年９月	3.2	3.2	3.0	3.1	2.3
２年１月	2.9	3.0	2.9	2.9	2.9

最初の４項目については0.1～0.3ポイントの減少が見られるが，２年の終盤という中だるみしやすい時期にしては高いと評価できる。とりわけ「専門に関する本や雑誌を読んでいる」は0.6ポイント上昇しており，専門への意識の高まりが感じられる。

③将来の見通し

進路についての考えの変化について考察する。調査は，はやく先生になりたい，はやく仕事（教師以外）に就きたい，大学院に進学したい，まだ決めていない，その他，から１つ選ぶ形式である。結果は以下の通りである。

１年９月	13(56.5%)	0(0)	5(21.7)	4(17.7)	1(4.3)
２年１月	12(52.2%)	2(8.7)	1(4.3)	6(26.1)	2(8.7)

依然として教師を志望している学生が半数以上である。また，「まだ決めていない」学生の２名は「先生か大学院かを決めていない」と書いている。それらを合わせると教師志望はさらに高くなり，教職に対する意欲の減退を防ぐのに成功しているようである。

これらの結果から，英語科の学生は教職意識に対する意識は高い状態で維持されていることがうかがえる。それはすべて「教育実習入門」がもたらしたものであるという判断は危険であるが，数人の学生に尋ねてみたところ，その影響は大きかったようである。したがって，早期の教育実習は，教職に対する意欲の低下を防止するのに，比較的長期にわたって効果があると結論付けられよう。　（文責：松浦伸和）

3.2　附属中・高等学校からの評価

(1) 附属中・高等学校

平成18年度，教育学部の新入生を対象に「教育実習入門」が試行的に実施された。このプログラムは，教師を目指して入学してきた学生に，早くからその意識を持ってもらいたいという趣旨で始められたものある。それまでは，教師を目指す学生が附属学校へ授業見学に来るのは，早くても２年次であった。これを入学当初に行い，自覚を促そうというプログラムである。趣旨そのものは否定されるものではないが，実際，問題がないわけではなかった。

実施されたのは４月であり，多くの新入生はその３月まで高校生であったわけである。まだ，高校生気分が抜けきっておらず，服装，態度にしてもさまざまな問題があった。また，彼らが附属の授業を見学して，自分の学校で受けた授業との違いは意識できたとしても，教える立場で授業を見ることはまずできなかったであろう。

一方，附属からすれば新学期の忙しい時期に，このプログラムが入ったために，実施にあたった担当教員にとっては大変であった。担任は新入生を迎えて，さまざまな事務手続きや，面談およびクラスづくりに専念できない状況が生まれた。また，この時期は，当初行事がひしめいており，授業は臨時時間割で行われているが，このプログラムのために，あらたな時間割を組まねばならず，非常勤講師への連絡も含めて，教務部は大変であった。さらに，授業担当者からすると，臨時時間割の中で，授業進度が確定しにくい状況の中で，指導案を作成しなければならなかった。

このプログラムを有効なものにするには，多くの改善が必要である。まず，大学においては，事前指導を行い，高校生気分の抜けきっていない学生に，時間の厳守をはじめ，観察態度など最低限のマナーを教えておくことが必要であろう。また，ある程度は授業を教師サイドから見ることができるようにしておかなければならない。そのためには，基本的な授業の構造，および指導案の見方も教えておいたほうがよい。しかし，実施時期とも関わって，学生に最低どの程度の知識を与えておく必要があるのかということの検討も必要である。「とにかく授業を見せておけば何か得るものがあるだろう」という発想で，このようなプログラムを実施してはならない。その代償はあまりにも大きいと言わざるを得ない。　（文責：原田良三）

(2) 附属東雲小学校

本年度の観察実習においては，大学１年生137名を対象に，国語・社会・算数・理科の４教科それぞれ２本の提案授業を行った。午前中に１本の授業観察とその協議，同じく午後１本の授業観察と協議会である。

今回実施の「○○教育入門」における学生の教育実習に関しては，授業を提供する附属学校側と授業を観察する学生側に，観察授業に対する認識のずれが感じられた。学生たちの授業中のメモの取り方，観察中の態度・姿勢，協議会での発言などにおいてである。それはまた，学生間だけでなく教科間においても違いが見られた。今回の観察実習がまだ試行段階であるにせよ，双方の共通理解がなければ期待する効果が上がりにくいものと考えられる。対策としては，実習生の参観目的を明確にすると共に，附属学校側もそれを認識して授業を行うことが考えられる。そうすることにより，学生は目的にあった授業観察を行い，附属学校も目的に沿った授業提案・協議会が可能になってくる。今後より有意義な実習内容を検討していきたい。

実施時期に関する検討課題としては，教育学部３年生の観察実習と接近しており，附属学校サイドにおける調整がつきにくいという状況が生まれた。さらには，大学側の教育実習の連絡調整窓口が複数存在したため，煩瑣な調整作業が必要となった。今後は，窓口を

一本化するなどの工夫が必要であると強く感じている。

授業観察当日は，４教科・８本の授業を提案した。学生にとっては，授業の流れ・発問・板書など，どれを取っても今後に向けて，刺激的な学習内容であったものと考える。授業の意図などについて，授業後すぐに協議会を設けたことは観察実習の教育的効果を高め意味深いものであった。しかしながら，授業提案者が自分のクラスを自習にして協議会に参加しなくてはならないという新たな課題も生まれてきた。特に，小学校低学年における自学自習の際の安全確保について吟味する必要がある。できるだけ自習しなくてもすむ環境を創り出していきたいと考える。

今回の実習は，１クラスあたりの参観学生の人数が，約35名という多めの設定となってしまったが，授業学級を増やすとその後の協議会の会場確保が難しくなったり，自習のクラスが増えたりという課題が連動して発生してしまう。附属学校サイドとしては，そのあたりの調整を図っていく必要もある。

さらには，参観学生の控え室の問題も生まれてきた。学生のことを考えれば，控え室も準備したいと思うが，全学級が授業を行っている状況下においては，学生の控え室を確保するのは難しいのが現状である。今後の予算化に期待したい。　　（文責：大松恭宏）

(3) 附属三原中学校

教師を志し広島大学へ入学してきた学生に，より早い時期に現場（中学校の生徒の状態，授業の状態等）を観察させることは，さらに“教師になろう”という意欲を昂揚させるとともに，理想の教師像に向かって目標を持たせることになる。

観察実習について，事前の注意事項等について

１．実施日　平成18年５月17日（水）

２．日程（1）8:30～8:40　出欠確認・資料配付

（2）8:40～9:30　オリエンテーション

（3）9:40～16:00　授業観察及び各教科討議

３．受講に際しての注意事項（大学１年ということで特別に実施）

①服装は，授業観察にふさわしいものにする。

②出欠確認時間までに登校すること。

③授業時間中や控え室では，静かに行動すること

④実習期間中は，校内全域において禁煙とする。

⑤各教室の授業は，教室が狭いので立って観察すること。

⑥授業観察のマナー等については，十分留意すること。

⑦質疑や私見は，生徒の前では控えること。

⑧期間中に得た生徒に関する諸情報は，決して他言してはならない。

と言う内容を事前学習して，観察実習は始まった。

観察実習（授業観察と討議）を実施しての感想

１．良かった点について

①意欲が高く，質問が活発に出て，活気があった。

②本校が２校目になり，質問等の仕方が分かってきており，前回校との比較で質問していた。

③熱意のある学生もいて，大学在学中に，授業以外でどんな学習をしておけばよいかという質問もあった。

④自分が受けてきた授業との比較で，どんな授業を目指せばよいかという質問があった。

⑤どんな授業が正しいのかという問いかけが多く，より理想の授業目指している姿が見えた。

２．改善を必要とするもの

①授業に目が行きすぎ，生活態度（言葉づかい，挨拶，観察態度，学校での過ごし方）の指導の必要性。

②教師としての資質に関する部分の指導の必要性

討議の司会は大学教員が行ったため，多くの教科は非常にスムーズに会が進んでいる。

３，４年生に比較すると，逼迫感がなく，感想が多い。その分，人間教師としての心構えや資質をじっくり創っていける学生である。　　（文責：金丸純二）

４．教育実習観察に関する検証：小学校教育実習の場合

4.1 ３年生の反応

2006年度２年生の「教育実習観察」は，附属小と附属東雲小については，それぞれ９月21日と25日の１日間，附属三原小については９月25日・26日の２日間にわたって実施された。いずれも事前指導と事後指導が行われているが，こうした２年生の観察実習生に関して，迎えた側の３年生の教育実習生がどのような思いを持ったかについて，若干の検討をしてみる。

すなわち，教育実習Ｉを終えた学生に対して行われた教育実習全般に関する一連のアンケート調査の中で，２年生の観察実習を受け入れたことに関する設問を以下のように行ってみた（４年生の教育実習Ⅱ生にも合わせて設問してみた）。その結果，下表にみられるように，初等教育教員養成コースの学生，障害児教育教員養成コース，教育実習Ⅱ受講生のいずれにおいても，高い割合で２年生の観察実習を肯定的に捉えている。ただし，教育実習Ⅱ生については64.3%と比較的低い肯定率となっている。これは，教育実習Ⅱ生（２週間実習）において，教育実習期間をもっと延ばしてほしい，教壇実習の回数をもっと欲しいという要望が，教育実習Ｉ（初等教育教員養成コースの学生は５週間，障害児教育教員養成コースの学生は４週間）の学生よ

りも大幅に多かったことと関連していると思われ，２年生の観察実習生を受け入れる余裕が教育実習Ⅱ生にはあまりないように感じられる。

（設問）自分たちが小学校実習を行う１年前に，先輩たちが行っている小学校実習を観察できる機会があればよいと思いますか。

（初等教育教員養成コース）					
	附属	東雲	三原	計	全体%
はい	30	45	37	112	74.2%
どちらともいえない	9	6	8	23	15.2%
いいえ	8	6	2	16	10.6%
計	47	57	47	151	100.0%
（障害児教育教員養成コース）					
	附属	東雲	三原	計	全体%
はい	6	11	6	23	79.3%
どちらともいえない	2	0	1	3	10.3%
いいえ	1	0	2	3	10.3%
計	9	11	9	29	100.0%
（教育実習Ⅱ生）					
	附属	東雲	三原	計	全体%
はい	8	11	8	27	64.3%
どちらともいえない	3	4	3	10	23.8%
いいえ	2	2	1	5	11.9%
計	13	17	12	42	100.0%

なお，上表において，いずれの実習生にも１割程度の非肯定者がいる。これに関して，アンケートの声を拾ってみると，以下のような意見があった。

「２年生のくっつき実習をする際には，その意味と，臨む姿勢，そして“何を”みればよいのかを明確にしてほしい。（本人が）」

「２年生の観察実習のあり方」，「２年生の態度」，「２年生は来なくていいと思う」

「２年生の観察実習は見直すべき。２年生に問題はなかったが，大学の計画と引率の教授に問題あり」

「現場に対して失礼な人が多いと思う」

以上のように，観察する２年生の実習態度に問題ありとする回答が多くみられ，実習に赴くまえのオリエンテーリングをより具体的に行い，かつ実習計画をより綿密化する必要があるように思われる。なお，教育実習Ⅱ生において，その２年生実習受け入れの余裕のなさに関連して，「実習Ⅱの実習時期はきつすぎる。免許自体２年生から取って，３年で実習に行けるのが教採，院試とかに重ならなくてよい」というような意見が多くみられた。

一方，２年生教育実習に関して，次のような建設的な意見もみられた。

「２年生の観察があったのは良いこと。他に２－３年の交流会があったらいい」

「前年度生との話し合いの場を設けてほしい」

「３年より前の１，２年の段階で，指導案の書き方などを指導するべき」

なお，観察実習生は，１クラスにつき数名程度と少人数に割り振られたせいか，教室や施設の狭さに関する３年生の苦情はみられなかった。

次に，２年生の教育実習観察に関連して，参考的に以下のような１年生からの教育実習観察についての設問を行ってみた。

（設問）大学１年次から実際に学校現場に出向く観察実習があればよいと思いますか

（初等教育教員養成コース）					
	附属	東雲	三原	計	全体%
はい	23	34	24	81	53.6%
どちらともいえない	15	14	15	44	29.1%
いいえ	9	9	8	26	17.2%
計	47	57	47	151	100.0%
（障害児教育教員養成コース）					
	附属	東雲	三原	計	全体%
はい	7	8	7	22	75.9%
どちらともいえない	0	3	1	4	13.8%
いいえ	2	0	1	3	10.3%
計	9	11	9	29	100.0%
（教育実習Ⅱ生）					
	附属	東雲	三原	計	全体%
はい	7	12	9	28	66.7%
どちらともいえない	3	4	2	9	21.4%
いいえ	3	1	1	5	11.9%
計	13	17	12	42	100.0%

本表から注目される点は，特に初等教育教員養成コースの学生において，肯定の割合が極端に低下し，かつ非肯定の割合が他の実習生よりも高くなる点である。この理由についての３年生からの具体的な意見はみられなかったが，比較的十分な教育実習観察，教育

実習期間と教壇実習回数を持った当該学生にとって，１年生にまで観察実習の幅を広げる必要もないという思いがあるのではないかということが類推される。

（文責：前田俊二）

4.2　附属小学校からの評価

(1) 附属小学校

３年次生の本実習の期間中に，２年次生がその様子を観察して何かを得ることができたか，と問われて，否と応える者はいないに違いない。確かに，個々は何某かを得て，翌年の我が身を想像することができて益するところが大であったであろうと思う。そのことは，昨年度の本研究でも「参加した学生の学習意欲や授業態度の向上のみならず，教員志望の意欲を一層高める結果となった」と総括されているから，今年度も同様であったと容易に想像できる。

では，そのことと，３年次生が持った「２年生が来る意味があるのかと思った。」「２年生が観察に来る有効性が分からなかった。せめて授業反省会くらい見ておかないと，見ただけのただの自己完結に終わってしまう。」という感想と，どう折合いをつければよいのであろうか。

被観察者の３年次生は，観察者である２年次生の観察実習に対する意欲・態度，活動内容に疑義を呈しているのであるが，これはあながち不当な評価ではない。本校の教員からも異口同音に同様のことが発せられている。

このことの要因を，安易に今年度の２年次生の資質に求めてはならないのであって，むしろ，昨年度の本研究で明らかになった課題が解決したのかどうかを問うべきであると考える。

昨年度に残された課題の一つとして，「今回は，『試行的』というタイトルが示す通り，実施までの期間が極めて短かったために，実習生の位置づけや役割，動きについて大学と附属，３年生と４年生との間などで，綿密な打ち合わせができなかった。」との指摘がなされているが，例えば，この点は改善されたのであろうか。昨年度は，「実施までの期間が極めて短かったため」という事情があった。今回も「試行」の段階だから，やむを得なかったという評価になるのであろうか。

教育実習の成否は「連携」にある。「意思疎通」と言ってもよい。大学と附属，大学と実習生，附属と実習生，実習生と実習生，あらゆる関係において，その意思疎通が図られていなければ，せっかくの試みが実り多いものにはならない。

先の３年次生の声は，２年生の観察実習の意義が伝えられていないことへの不満とも受け止められるのである。２年次生の観察実習に異論はなかろうが，ただ経験させればよい，ということであってはならないのは言うまでもない。

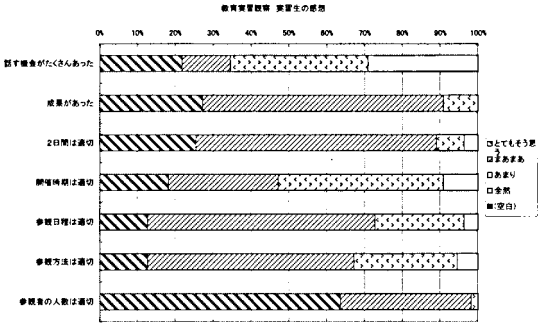
（文責：神野正喜）

(2) 附属三原小学校

―附属三原小学校における教員および３年次生アンケート結果から―

ここでは，２年次生が行った教育実習観察に対して本校教員および３年時生が回答したアンケートをもとに，結果および考察を述べる。

質問項目は教員と３年次生には同じ内容とした。



「話す機会がたくさんあった」については，教員は70％が話をする機会があったが，本実習生は30％でつながりがなくあまり話をする機会はなかったようである。

「成果があった」については，どちらも90％以上で２年次生にとっては意義のあるものだと考えていることがわかる。

「２日間は適切である」については，どちらも80％以上で，イメージを持つことができる期間で，長くなると教員にも本実習生にも負担になると考えていることがわかった。

「開催時期は適切である」については，教員は教生代表授業があり厳しいところを見てもらっておおむねよかったと考えている。本実習生は普段の授業を２日間見てもらうのがイメージを持てていいのではないか，その方がゆっくりと接することができると考えて

いることがわかった。

「参観日程は適切だった」については，どちらもおおむねよかったと考えているが，協議会の途中で退席することになったのはよくなかったという意見があった。

「参観方法は適切だった」については，教員はおおむねよかったと考えているが，本実習生の中には２年次生は実習生の動きを見るのか，子どもたちの様子を見るのか，何を目標に来ているのかよくわかっていなかったのではないかという意見があった。

「参観者の人数は適切だった」については，どちらもほぼ100％に近く２～３人が適切であると考えていることがわかる。

以上のアンケート結果をもとに考察したことを述べる。

○この教育実習観察は，新しい取り組みで，４年間を通して教員になる意識を育てるためには有意義な取り組みであり，来年度以降も続けていってほしい。また，今後ますます明確な意識を持って学んでいく学生を育てるシステムを開発していく必要があると考える。

○開催時期や日程については，本実習生の意見を取り入れて，本実習生の負担にならないもの，観察実習生（２年次生）に対して意義のあるものに，大学側も附属学校側も変えていかなければならないだろう。

○教育実習観察の意義をより高めるためには，オリエンテーションをしたり，簡単な実習録を作成したりするなどして，大学の授業の一環として組み入れて行うべきではないかと考える。

今回，初めて教育実習観察を行ってみて，多くの２年次生が熱心に授業観察をし，真摯に先生方や児童たちと関わろうとしていた。これは，一昨年度より取り組んでいる教育実習プログラムの成果の表れであろう。今後，４年間を通した教育実習の形をさらに見直して，教師としての高い意識を持った人材を育てるための教育実習プログラムの開発を望む。　（文責：見藤孝二）

(3) 附属東雲中学校

今年度の教育実習観察では，前期19名（６月２日～６月13日），後期11名（10月10日～10月17日）の観察実習生を受け入れた。そして，それぞれの観察実習生は２～３日間にわたって，次年度に自分たちが体験すべき実習内容を事前に体験した。その結果について，観察実習生を受け入れた10名の本校教員に，①観察実習生の態度や意欲，②指導の実際，③現行の教育実習観察についての評価，④来年度に向けての改善点（自由記述）の４観点をアンケートした。

観察実習生の態度や意欲については，本実習までに身につけておくべき知識・技能，態度などを自覚するうえで，「十分な効果があった」「すすんで吸収しようとしていた」など，肯定的な評価が６名の教員から示された。どちらでもないの３名からは，「十分に把握できていないので何ともいえない」「受け取った実習生次第」などの意見が寄せられた。また，「自分で観る視点をもって望んでほしい」との指摘も見られた。

観察実習生に対する指導の実際については，教育実習生を指導したが４名，指導しなかったが５名に分かれた。観察実習生への指導は，本実習の指導もあって義務づけられていないが，副校長が朝夕に自己課題と反省の確認，講話を行った。しかしながら，受け入れた教員においても「授業の協議会等で指導した」「（子どものへ対応など観察実習生から）質問することが多い」など，観察実習生への指導も不可避に行わなければならない状況があるといえる。

教育実習観察システムの評価については，おおむね本年度試行のままでよいが３名，改善を要するが６名であった。時期，日数に関しては，肯定的な意見が目立ったが，人数に関しては物理的な問題から多いという意見が支配的となった。また，観察実習生の課題意識・自覚，大学での事前・事後指導に関しても，改善点としてあげられた。「目標設定や計画があった方がよい」「観察前に（ペアの）本実習生との話し合いの機会があるとよい」「（その日の人数は増えるが）２～３日間に集中した方がよい」などの意見も寄せられた。

最後に，よりよい教育実習観察にするための意見として，「何のためか，事前指導が必要」「どこまで指導すればよいか」「系統性のある実習指導（が大切）」「希望者だけでなく，全員が行う方がよい」などといった意見が記された。まず，教員養成プログラムにおける教育実習観察の系統的な位置づけ，教育実習観察の客観的・具体的な到達目標を一層明確にしていくことが急務である。そして，観察実習生と附属学校，大学が評価基準を共有していくことが，この教育実習観察をより有意義な実習にするものと考える。

（文責：島本　靖）

5．課題と展望

5.1 「特色ある教育実習プログラム」の成果と本格的実施に向けての具体的課題

既に述べられているように，「教育実習入門」及び「教育実習観察」の試行に参加した学生の教員志望に対する意欲は大きく高まり，学習意欲や授業態度が向上するという成果が見られた。これは昨年度と同様の結果であり，期待以上の成果が得られたと評価できる。

他方で，学部の１年生や２年生から教育実習科目を

履修することは，教員志望の動機が切実になっていない段階で授業観察などに赴くことを意味しており，「授業観察の態度が悪い学生がいる」等の指摘が附属学校教員から寄せられた。このような指摘は問題点の一例であり，学部におけるオリエンテーションやガイダンスの充実はもちろん，学部教育と附属学校における教育実習との緊密な連携を図っていく必要がある。

二年間の試行を踏まえて，学部教育４年間の教育実習プログラムの枠組みは一応整備された。平成19年度入学生から「特色ある教育実習プログラム」は本格的に実施されることになっている。今後は，より一層充実した教員養成をめざして，中身の充実に向けた努力を重ねていく必要がある。　　（文責：木村博一）

5.2　広島大学における教員養成及び教育実習の課題と展望

「教育実習観察」「教育実習入門」など，〈特色ある教育実習の試行的取り組み〉はそれぞれ成果をあげ，本稿においてさらにその課題も示されたところである。折しも，中央教育審議会や教育再生会議で新しい教員養成の在り方が議論され，法人化後の広島大学においても今後の教員養成の在り方が検討されている。そのようななかで本研究はこの先，次なる構想に向かわなければならない。

その点では，広島大学として，教員養成のトータルな理念を明確にすべきであると考える。本来ならば，その全体構想の下に４年間の教員養成のプログラムがあるのでなければならない。もちろん教育学部にあっては，学部４年間のすべてのカリキュラムの中での関係も整理しなければならないだろうが，教員養成のプログラムが全体のなかでどのように位置付けられ，達成すべき目標がどういうところにあるのか，明らかにしなければならないはずである。

したがって，今一度，新入生の「教育実習入門」や本実習前年度の「教育実習観察」の「目的」がどのように示され，これが実施する学部スタッフや附属学校スタッフにどれだけ浸透しているか，そしてこれに参加する学生にどれだけ徹底しているか，そしてまたどれだけその成果が上がっているのかについて整理し，課題を確認しなければならない。本稿では，これらのことはすでに示されているわけであるが，次の段階は，この試行段階から本格的実施に移り，これを制度として整えていくことである。そのために何が必要であるのか，いくつかの提言を行っておきたい。それを以下に列記してみる。

① 教育実習に関する組織
② 教育実習の理念と構想
③ 教育実習カリキュラム構想
④ 教育実習に関する内外への啓発
　・ガイドブック「教師への道」（仮称）
　・パンフレット「広島大学と教員養成」（仮称）
⑤ 教育実習体験の記録と考察
　・「○○ノート」の編集
　・デジタルポートフォリオなどの可能性
⑥ 大学学部担当者と附属学校担当者との，教育実習円滑実施に向けての情報交換

以上のことがらについては今後，大学学部側と附属学校側との協議が必要である。学部スタッフ，すなわち教職専門，教科教育，教科専門のそれぞれ中心となる者がこのことをよく踏まえ，特に教科教育の責任者がその調整役を担い，教育実習現場である附属学校と連携しながら理論と実践を繋ぎ，指導の体系を確固たるものにしなければならない。　　（文責：竹盛浩二）

参考文献

1）若元澄男他，「『特色ある教育実習プログラム』の試行的取組」，『広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要』，第34号，2006. 3，pp. 1-2
2）若元澄男他，「広島大学における『特色ある教育実習プログラム』の構築に向けて」，『広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要』，第33号，2005. 3，pp. 31-40
3）前掲論文１），pp. 1-10
4）松浦伸和他(2006)「新入生を対象とした教育実習と教職意識との関連に関する研究プロジェクト」『共同研究プロジェクト』（第４巻 2006. 3）pp. 91-108